

源平合戦・一の谷の戦い「平敦盛の最期」

織田信長は本能寺の変で「人間五十年。下天のうちにくらぶれば夢幻のごとくなり」と謡い最期を飾ったとされていますが、これは源平合戦の一の谷で若くして散った公達・平敦盛（平清盛の異母弟・経盛の子）を題材にした幸若舞「敦盛」の一節で、信長は桶狭間の戦いの前にも謡ったといえます。もともと本能寺の方はそんな余裕はない筈で、後日作られたフィクションの可能性あり？

そこで源平合戦ですが、一の谷の戦いは、平家滅亡の端緒となった戦いで、源義経が断行した騎馬による鴨越えの奇襲（異説あり）に背後をつかれた平家は油断もあって総崩れ、船で沖へ逃げようと海へ向かったのです。

平清盛の甥にあたる弱冠十六歳（十七歳説も）の初陣だった平敦盛もその中にいたのです。味方の船に乗り込もうと白馬にまたがり波打ち際に乗り入れたそのとき、日本一の剛の者と頼朝をして言わしめた源氏の武将熊谷直実から「返せ！返せ！敵に背を見せるとは卑怯な！」と一騎打ちを挑まれ、敦盛は潔くそれに応じたのです。笛の名手ではあった敦盛も一騎打ちでは直実の敵ではなく、組み伏せられ首を刎ねられてしまったのです。

直実も敦盛とは知らず一騎打ちで組み伏せたものの兜を外して顔を見ると自

分の子供と同じくらいの年頃の高貴な顔立ちの若者であることに気が付き、名を尋ねたのです。しかし敦盛がこれに答えなかったので躊躇ためらいながらも、後ろから迫る味方の将兵の声に押されて敦盛の首を刎ねたといえます。後に直実が戦いに無常を感じ出家したのも、この敦盛との一騎打ちが遠因となったのです。直実は敦盛を弔う碑を各地に建てると晩年は念仏三昧の生活を送り、心の安定を得て一生を終えたと伝えられます。

敦盛と熊谷直実の一騎打ちと敦盛の非業の死について述べてきましたが、本稿で伝えたいことは、十六歳の若さで死を迎えることになった悲劇の主人公である敦盛に対する世間の憐憫と同情がその後如何に広がり、今日に至っているかについてなのです。

敦盛の壮烈な最期を伝えるものには、平家物語・源平盛衰記などの「物語・読み物」が最も有名ですが、信長の好んだ幸若舞をはじめ能・謡曲・琵琶曲や歌舞伎・人形浄瑠璃等の芸能分野でも大衆の関心を集めました。

とりわけ琵琶法師による弾き語りや、読み書きの出来ない庶民層にも広く浸透する役割を果たし、江戸時代になると琵琶法師は検校けんこう（室町時代以降の盲人に与えられた最高の官位）の位が与えられるほど優遇されたのです。

敦盛の死の悲劇性をさらに高めたものに彼が愛した横笛「青葉の笛」の存在があります。一の谷の戦いが始まる日の夜明け前、敦盛は海岸に出て愛用の横笛を

奏^{かな}でたといいいます。死を覚悟していたのでしょうか、その音色の美しさに敵軍である源氏の将兵までもが聞き惚れたと平家物語は語っています。直実に首を刎ねられた折、敦盛が横笛「青葉の笛」を錦の袋に入れ腰に下げていたのを見て、あの美しい音色はこの笛からだったのかと将兵の涙を誘ったといっています。

また、鎌倉幕府の第九代執権の座にあった北条貞時^{さだとき}によって平家一門の菩提を弔うために建立されたとされる「須磨の敦盛塚」の「五輪の塔」（写真参照）は山陽道に面していて通行する人々の関心を集めていました。



山陽道（西国街道）は江戸時代には、西国諸大名の参勤交代で東海道に次ぐ主要道路として賑わいを見せ、参勤交代の時期になると（主に四月頃）、街道全体が大名行列で埋め尽くされほどだったといっています。この道路が長崎の出島へ続く唯一の道路であったため商人や役人をはじめ外国の使節団や蘭学者などの往来も多

く最新の情報や文化が伝播される道路になっていたのです。

その山陽道近くの茶屋で「敦盛そば」（「熱盛りそば」をかけた）が売られていたことはあまり知られていません。

江戸時代中期に出版された当時としては唯一の蕎麦の専門書だった日新舎友

蕎子著「蕎麦全書」（寛永四年・一七五二）にも「播州 舞子浜敦盛そば」の名が見られほど有名だったようで、遅くとも江戸時代中期頃までには「敦盛塚」の近くの街道沿いで「敦盛そば」が売られていたことは間違いなさそうです。

西国街道を旅する人や大名行列もこの茶屋で一休みしながら名物の敦盛そばを頂きながら敦盛の故事を偲んだといわれています。（田辺真人著「須磨の歴史散歩」）

また蜀山人こと太田南畝の狂歌（革命紀行・文化元年・一八〇四）にも・

「呼び止めて 年も二八のあつもりを 打ち出したる 熊谷のそば」とあり、

長崎の奉行所に勘定方として赴任する途中、敦盛の五輪の塔近くの蕎麦屋で詠んだものと推定されます。

江戸時代中期頃までの「盛りそば」はそば粉の質が悪く、蕎麦職人の腕の問題もあって、ぶつぶつに切れてしまうものが多かったので、せいろに入れて蒸した時代があったのです。江戸では間もなく小麦粉二割を繋ぎにした「二八そば」の全盛時代が来るのですが、上方ではうどんが中心だったので蕎麦は「熱盛」が残ったのだとも言われています。

確かに京都には御所の近くに「竹邑庵太郎敦盛」が、大阪には堺に創業三三〇年の歴史を持つ「ちく満」が熱盛そば専門蕎麦屋として繁盛しております。

いずれも品書きは「熱盛そば」一種類で、注文は蕎麦の量（一斤と一斤半）を

指定するだけのシンプルなシステムになっています。

いちど湯がいたあと冷水で締め、再びせいろに入れて蒸すやり方で、せいろの蓋を取るといっきに湯気が立ち上がると共にむせ返るような強いそばの香りが漂い、熱盛そばならではの雰囲気醸し出してくれます。東京では見ることにない蕎麦屋風景です。江戸と上方の蕎麦事情の違いもあるでしょうが、私は西国街道の「敦盛の五輪の塔」が果たした役割がより大きかったと考えています。

最期になりましたが、「青葉の笛」は明治三十九年文部省尋常小学四年唱歌に取り入れられ広く歌われるようになったことを申し添えておきたいと思います。

一の谷の戦破れ 討たれし平家の公達あわれ

あかつき 暁寒き須磨の嵐に 聞こえしはこれか青葉の笛

「日本国民としての自覚」を促しかつ醸成することを目的にして文部省は「青葉の笛」を小学生唱歌に取り入れたのでしよう。当時の時代背景が透けて見える一事です。「平家物語から果ては敦盛そばまで」、敦盛の悲劇の様子は世間の隅々にまで広がり、ついには国家認定の小学生唱歌にまでなったのです。

「青葉の笛」は須磨寺に常設展示されています。